



10月27日、延安革命記念館を訪れた習近平総書記と中央政治局常務委員たち。
左から趙樂際、王滬寧、蔡奇、習近平、李希、丁薛祥、李強（新華社／アフロ）

習近平派一色の新指導部 ——最高指導部 政治局常務委員の顔ぶれ

一〇月三日、中国共産党中央委員会
は習近平第三次政権を支える
党中央政治局常務委員を選出した。
全員が習近平総書記に近い人物。
彼らが長期政権の担い手となるのか。

神戸大学講師
日本国際問題研究所研究員
李昊

リ コウ ニ〇二〇年東京大学大学院法
学政治学研究所博士課程修了。博士法
学。専門分野は比較政治、近現代中国
政治、東アジアの国際関係。著作に『中
国共産党新政治局常務委員の「プロファ
イリング」』『習近平政権の10年と第20回
党大会への展望』など。

中国共産党第二〇回全国代表大会が終わり、新たな指導部が発足した。事前の予想通り、習近平が総書記に留任し、「異例」の第三期政権をスタートさせた。新指導部人事は、当初の予想を超えて、習近平の完勝となった。高齢の栗戰書（全国人民代表大会常務委員長）と韓正（國務院副総理）は予想通り退任したが、最高指導部にとどまると予想されていた李克強（國務院総理）と汪洋（政治協商会議主席）は、年齢が比較的若いにもかかわらず、中央委員に再選されず、引退が決まった。両者はいずれも胡錦濤前総書記に近々と見られていた。第六世代の最高指導者候補として注目されてきた胡春華（國務院副総理）は政治局常務委員に昇格するどころか、政治局委員にすら選出されず、異例の降格となった。

最高指導部に留任した趙樂際と王滬寧は、習近平の権力強化に貢献してきた。さらに、新たに選出された四人の new 政治局常務委員はいずれも習近平と深い関係にある人物である。新最高指導部人事は、習近平派一色となった。

新最高指導部に、後継者と目される人物はいない。五年後の党大会で習近平が最高指導者に留任し、少なくとも四期目までは続ける可能性が高まったと言えるだろう。本稿では、新最高指導部のメンバーのプロフィールを紹介する。

習近平

一九五三年生まれ。党総書記、国家主席、中央軍事委員会主席。一〇年の統治を経て、反腐敗運動による政敵の追放、党の「核心」としての地位の獲得、自らの名を冠した「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」の提起と、少しずつ権威を強化してきた。慣例とされてきた六八歳定年制を打破して、ついに三期目の政権を発足させた。過去に中央軍事委員会秘書長・耿飜の秘書を務めた経験があり、軍との関係が深い。河北省、福建省、浙江省、上海市と地方でのキャリアが長い。特に浙江省は民間企業が活発であることもあって、就任当初までは市場経済重視の開明的な指導者として習近平に期待する声もあったが、就任後は秩序重視、国家重視の強権的な統治を展開している。「太子党」の代表格として知られるが、必ずしも太子党を重用していない。むしろ各勤務地で部下だった人物を次々と抜擢しており、第三期政権では最高指導部を自分に近い人物で固めた。人事では完勝を果たしたが、党大会では、党主席に就任することもなく、党員に習近平への忠誠を事実上義務付ける「二つの確立」の党規約への明記や「人民の領袖」という地位の公式化も実現しなかった。

李強

一九五九年生まれ。来年三月の全国人民代表大会で国务院総理に就任すると見られている。党大会前の役職は上海市党委員会書記だった。浙江省長、江蘇省党委員会書記、上海市党委員会書記と長江下流域の三つの経済が発展した重要地域の指導者を歴任しており、飛び抜けて華麗なる経歴を持つ。他方で党中央や中央政府に勤務した経験がなく、国家運営の能力は未知数である。過去の総理は初代の周恩来以外いずれも副総理を務めた経験を有するが、李強の抜擢はその慣習を破ることとなる。総理就任までの数カ月間、いったん副総理に就任する可能性もある。

李強は、習近平が浙江省党委員会書記を務めていた時期に、秘書長として習近平に仕えた。今期指導部の中でも習近平が特に信頼を寄せる側近中の側近である。今年の春、上海での新型コロナウイルス感染拡大を食い止められず二ヵ月にわたってロックダウンに追い込まれて、視察時に直接市民から批判を浴びせられるという一幕もあった。混乱の責任を取られ、解任されるとの噂が広まったが、結果としてはキャリアに傷がつかず、大抜擢となった。それほどまでに習近平の寵愛を受けていると言えるだろう。

趙樂際

一九五七年生まれ。政治局常務委員に留任し、来年春に全国人民代表大会常務委員長に就任する見込みである。党大会前の役職は汚職腐敗の摘発を担う中央規律検査委員会書記であった。内陸の青海省でキャリアの大半を過ごした。青海省と陝西省の二つの地域でトップとなる党委員会書記を務めた経験を持つ。本籍が陝西省同士の縁で習近平と近いとも言われるが、それよりも二〇一二年から五年間中央組織部長を務め、人事面で習近平の勢力拡大と権力強化に貢献した点が習近平に評価されたと思われる。陝西省党委員会書記時代には、習近平の父親である習仲勲の墓の大規模拡張を断行したとも言われる。

前任者の王岐山の活躍ぶりに比べると、反腐敗運動担当としては地味なようにも見えるが、警察や司法を司る政法部門で大規模な摘発を展開し、習近平が長らく影響力を十分に行使できていなかったといわれる部門の掌握に大きく貢献したことは言及に値する。陝西訛りが強く、記者会見や取材嫌いで知られており、メディアに登場することが少ない。そのこともあって、人となりがあまり知られておらず、謎めいた人物である。

王滬寧

一九五五年生まれ。政治局常務委員に留任し、来年の春に国政諮問機関である人民政治協商会議全国委員会主席に就任する見込みである。党大会前の役職は党中央指導部の事務処理機構である中央書記処の筆頭書記であり、イデオロギー部門をも担当していた。上海の名門である復旦大学のスター政治学者だったが、江沢民に見出され、九五年にブレーンとして中国共産党内シンクタンクである中央政策研究室に移った。以後、江沢民、胡錦濤、習近平ら三代の総書記の理論ブレーンとして重用されている。習近平の「中国の夢」「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」などの理論構築に深く関わったと信じられており、二〇二二年の第三の「歴史決議」の文書作成チームを束ねたと言われる。習近平の権威強化、権力確立に理論面で大きく貢献し、最高指導部に留任となった。

一貫して理論畑を歩んできたため、行政経験が皆無である。長い期間をかけて地方で行政経験を積むのが一般的に中国共産党指導部にあって、異色の存在である。政治学者としては、集権的な体制によって政治的な安定を維持することを重視する論考を数多く発表していた。

蔡奇

一九五五年生まれ。中央書記処の筆頭書記。党のイデオロギー部門をも司ると見られる。党大会前の役職は北京市党委員会書記だった。習近平が勤務経験を持つ福建省と浙江省に長く勤め、習近平に近いことが知られている。二〇一四年、習近平の肝煎りで新たに設立された中央国家安全委員会の弁公室副主任に抜擢されて以降、ステップアップを加速させた。一六年以降、北京市党委員会副書記、副市長、市長代行、市長を経て、一七年五月には北京市党委員会書記となった。同年秋の党大会後には、ヒラ黨員から一気に政治局委員まで出世した。北京市のトップとしては、一八年春に市内の低所得者層の強制排除を推し進めたことが広く知られている。

党大会前、最高指導部の有力候補として名前が上がることはほとんどなかった。今期最高指導部人事最大のサプライズと言える。何が評価されたのかは不明だが、北京冬季五輪の責任者を務めて、成功に導いたことが一因となった可能性はある。一貫して習近平を支持し、今年の党大会中も習近平を「人民の領袖」と礼賛していた。この習近平への忠誠が何より重要だったことは言うまでもない。

丁薛祥

一九六二年生まれ。党大会前の役職は、中央弁公庁主任であり、国家主席弁公室主任（すなわち習近平の秘書）を兼任していた。第二期政権では、習近平の外遊や地方視察に同行していた側近中の側近だ。九九年まで上海材料研究所に勤め、機械工業部門のエンジニアだった。その後政治の道を歩み、組織部門や秘書畑に長らくいた。習近平が二〇〇七年三月に上海市委員会書記に着任した後、丁薛祥は五月に上海市委員会秘書長となり、習近平に仕えた。習近平が最高指導部入りして中央に移るまで、両者が一緒に仕事したのは約半年程度だったが、その後の展開から、短い期間に緊密な関係を築いたことは明らかだ。

一七年に政治局委員となつて以降、丁薛祥は繰り返し習近平を礼賛し、権威強化を支えてきた。新指導部では、序列六位である。ほとんど行政部門の経験がないにもかかわらず、来年の全人代において國務院副総理に選出されると見られており、大きなサブライズとなった。丁薛祥の昇進の最大の要因は、習近平との個人的な近さであり、それ以外に目立った政治的資源はない。新政治局常務委員会の中では最も若い、後継者とみなす向きはない。

李希

一九五六年生まれ。汚職腐敗の摘発を担う中央規律検査委員会書記。党大会前の役職は、広東省党委員会書記だった。西北地域の甘肅省と陝西省に長く勤めた後、上海市委員会の組織部長や副書記、遼寧省の省長や党委員会書記などを務めた。遼寧省時代には、前任者の汚職腐敗、全国人民代表大会の省代表選出における票の売買、省の経済統計の不正、全国唯一のGDPマイナス成長など多くの難題に直面した。それらを立て直した「功績」が評価され、二〇一七年に政治局委員に抜擢され、広東に移った。政治局入りしてからは、美辞麗句を並べて習近平をたたえ、習近平のリーダーシップ確立を支持している。

習近平に近いと言われるが、キャリア面での直接のつながりはない。ただし、李希の出身地である甘肅省の両当県は、習近平の父親である習仲勲がかつて武装蜂起を行った場所であり、ゆかりがある。また、李希は陝西省延安市の党委員会書記を務めたことがあり、文化大革命中に習近平が「下放」されていた延安市にある梁家河村を党員の学習基地としたことが習近平に評価されたとも言われる。政策面では派手さがなく、特徴がない。●